別紙３

令和４年度厚生労働科学研究費補助金（女性の健康の包括的支援政策研究事業）
分担研究報告書

【アドバンスド調査】大学での健康支援・保健管理における「性差の視点」導入についての実状調査

研究分担者　片井 みゆき　政策研究大学院大学 保健管理センター 教授

研究要旨
本分担研究においては、大学での健康支援・保健管理における「性差の視点」導入についての実状調査を行うことにより、女性の健康支援を行うための基礎データを明らかにすることを目的にする。本年度は、令和3年度に実施した全国の保健管理センター(全国大学保健管理協会加盟509大学)を利用・相談に訪れた学部学生を対象とする実状調査を解析するとともに、解析結果から抽出された性差の課題を深掘りするためのアドバンスド調査を実施し、協力を得られた大学を解析対象とした（回答期間：令和5年2月20日～令和5年3月8日）。
示唆に富む記述回答を多数得た。探索的調査では、全体的にコロナの影響で学生の相談機会減少が見られ、相談形態は非対面の各種方法が増え、コロナ禍で男女共件数の増加した相談は、対人関係の減少、家族との関わり、経済的な問題、摂食の問題、不安、ストレス、孤独、コミュニケーション不足、オンライン授業の問題、不適応だった。コロナ禍で「性差」が見られた相談として、男性は精神的な不安、女性は友人からの反応、副作用が挙げられた。一方、コロナに限定せず「性差」が見られた相談として、女性は友人、恋人、家族関係に起因するメンタル不調が見られ、摂食の問題に至るケースが指摘された。LGBTQに関する回答は極少数だった。保健管理センター等主体の健康教育は約半数の大学が取り入れているが「心身の性差」の取り扱いは低い割合であった。健康教育のテーマは、メンタル面での性差では、LGBTQ、性的興味の男女差、デートDV、身体的な性差では、月経、婦人系疾患、妊娠・排卵・射精の仕組み等が報告された。アドバンスド調査では、家族との関係、やせ・ダイエット（拒食・過食など）の問題、メンタル面と食事摂取の結びつきが女性に多く見られ、昼夜逆転など生活の乱れ、ステイホームから授業開始になり不適応、睡眠の問題などの生活習慣についての相談は男性に見られる傾向があり、特にコロナ以降の時期において（第1期：2020年1月～2022年2月および第2期：2022年3月～2023年3月）、探索的調査で見られた傾向が支持される結果となった。
メンタル不調の「表現型」に性別の差が見られる傾向があり、女性では摂食障害の発症、男性では生活習慣の乱れが指摘された。不安を自覚し保健管理センターに来室する学生は男性に多い印象がある。LGBTQとしての回答は極少数であったが、これは、本人から自己申告があった場合にのみ記録している影響もあったと考えられる。学生の学年などの属性に加え、心身の不調や家族との問題をコロナ前から抱えている学生ほど、コロナ禍による心身への影響がより大きいことが示唆され、学生の属性や性別、生活環境を考慮した対応の必要性が示された。今後、大学保健においても「性差の視点」導入の必要性・重要性が示唆された。

研究協力者氏名・所属研究機関名及び所属研究機関における職名
■森 瑞貴・政策研究大学院大学 片井研究室 研究員
■田中 ゆり・政策研究大学院大学 保健管理センター 保健師

Ａ．研究目的

アフタコロナ時代においては、「女性不況」と「テレワークなどの働き方の変化」などに 伴う急速な社会変化である「新しい日常(New Normal)」に適合した、女性の健康支援が重要となる。

平成30年度～令和2年度の先行研究「厚生労働科学研究 保健・医療・教育機関・産業等における女性の健康支援のための研究」において、女性の健康を横断的・予防医学的に教育・支援するために、思春期前から更年期にわたるシームレスな健康教育と包括的な保健・医療・教育 機関・産業等の各支援者養成のためのプログラムを開発し、教育支援ガイドラインを作成してきた。

今回、アフタコロナ・ウイズコロナの新しい日常において、女性自身が各ライフステージで直面する様々な健康リスクの回避や対処が行えるように保健・医療・教育機関・産業等の場で適切な教育や支援を提供するシステムの礎を作る目的で、女性の健康支援を行うための基礎データを明らかにしつつ、新しい時代の女性健康支援のための情報提供・教育体制・相談体制構築に関する基礎資料を作成し、ガイドラインを作成改定することとした。

本分担研究においては、大学での健康支援・保健管理における「性差の視点」導入についての実状調査を行うことにより、女性の健康支援を行うための基礎データを明らかにすることを目的にする。

本分担研究の結果、アフタコロナ・ウイズコロナの新しい日常に即した、保健・医療・教育機関・産業等の各専門家をシームレスな連携可能な健康教育、相談体制構築をそれぞれの地域に沿って行うための基礎資料の作成と、各分野でシステム構築を行うことが可能となるガイドラインの作成改訂に寄与することを最終的目標とした。

令和3年度は、まず問題点を抽出するため、全国の保健管理センターを対象に、健康相談・健康支援の内容と性差、保健管理における性差の視点の導入についての探索的調査を行い、令和4年度は、同探索的調査の解析、および、解析結果から抽出された性差の課題を深掘りするため、アドバンスドスタディを行うこととした。

Ｂ．研究方法

研究開始前に、国立大学保健管理施設協議会倫理委員会に倫理審査を申請し、本研究の承認を受けた（承認番号:2110-01及び2201-01）。その後、本学学長の研究開始の許可（許可番号：S2021-3及びS2021-4）を受ける等、所定の手続を行った。

大学における女性の健康課題を明らかにする

ために、まずは、令和3年度に実施した健康相談・健康支援の内容と性差、保健管理における性差の視点の導入についての探索的調査の解析を行った。

それをもとに性差の課題を抽出するとともに、それら課題への詳細な記述回答があった大学を対象に、電子メールで本研究趣旨を説明し、アドバンスド質問調査票（選択式・自由記述式を含む）への回答を依頼した。質問調査票内では、各設問において新型コロナウイルス感染症の影響を考慮するため、コロナ以前・以降を以下の通り定義し、期間ごとの回答を依頼した。

A）コロナ以前：2019年12月まで
B）コロナ以降 第1期：2020年1月～2022年2月
C）コロナ以降 第2期：2022年3月～2023年3月

〔B）コロナ以降 第1期および第2期は、令和3年度の探索的調査の前後で定義した。〕

回答方法はGoogle Formを用い、回答期間は、令和5年2月20日～令和5年3月8日とした。

回答欄の性別は、男性・女性・LGBTQの3区分とした。

1）研究対象者数およびその選択基準

令和3年度に実施した全国の大学保健管理センター（全国大学保健管理協会加盟509大学）を利用・相談に訪れた学部学生を対象とする実状調査への回答133大学のうち、自由記述回答の部分において性差の課題への詳細な記述があったのは、26大学であった。そのうち、アドバンスド調査への協力を得られた9大学を解析対象とした。

2）データ解析

主要評価項目：

■ 大学での健康支援・健康教育の実施状況と方法
■ 大学での健康相談や支援の状況と内容において性差が見られるか
■ 健康教育において「性差の視点」が導入されているか
■ 女性特有の健康支援課題に対する取り組み状況

副次的評価項目：

■ 長期にわたる新型コロナウイルス感染症蔓延による影響
■ 回答者の属性(職種、年代、性別)

解析方法の概要：

回収された質問調査票の選択肢および自由記載結果を集計し、現状の把握、問題点の整理、傾向の分析

（倫理面への配慮）

1）説明の機会と方法

説明対象は、研究対象者の所属する集団（担当者等）であり、説明書を書面にて提示する。

2）同意の機会と方法

大学保健管理センターに対し本研究の目的を説明書によって説明し、回答をもって調査への同意とする。

3）参加・中途離脱の任意性

本研究は新しく試料・情報を取得するアンケート調査研究であり、取得する情報に要配慮個人情報は含まないため、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」（令和3年6月30日施行）の第4章 第8の1（1）イ（イ）②（ii）の規定によりインフォームド・コンセントを受けないが、第4章第8の6①～⑥の事項を含む説明書を用いて通知し、質問調査票の返却を以て同意とみなすことで、研究対象者の所属する集団が研究へ参加することを拒否できる機会を保障する。

C．研究結果

令和3年度の探索的調査においては、コロナの影響で学生の相談機会減少が全体的に見られた。相談形態は、コロナ以前に主要であった予約なし対面が減少、予約制の対面、電話、メール、Zoom等、非対面の各種方法による相談件数が増えた（図1、図2）。

コロナ禍で男女共に件数の増加した相談は、対人関係の減少、家族との関わり、経済的な問題、摂食の問題、不安・ストレス・孤独、コミュニケーション不足、オンライン授業の問題、不適応等であった。

コロナ禍で「性差」が見られた相談として、精神的な不安は男性に見られる傾向があり、女性は友人からの反応、副作用についての相談が挙げられた。一方、コロナに限定せず「性差」が見られた相談として、女性は友人関係、恋人関係、家族関係に起因するメンタル不調が見られ、摂食の問題に至るケースが指摘された。LGBTQとしての回答は、本人から申告があった場合のみと推測され、その影響もあってか、極少数であった。

保健管理センター等主体の健康教育は、約半数の大学が取り入れているものの、「心身の性差」の取り扱いは低い割合にとどまった（図3、図4）。健康教育のテーマは、メンタル面での性差では、LGBTQ、性的興味の男女差、デートDV等、身体的な性差では、月経、婦人系疾患、妊娠・排卵・射精の仕組み等が報告された。

令和4年度のアドバンスド調査においては、コロナ以降（第1期：2020年1月～2022年2月および第2期：2022年3月～2023年3月）、「性差」が見られた相談として、家族との関係、やせ・ダイエット（拒食・過食など）の問題、メンタル面と食事摂取の結びつきが女性に多く見られ、昼夜逆転など生活の乱れ、ステイホームから授業開始になり不適応、睡眠の問題などの生活習慣についての相談は男性に見られる傾向があった。LGBTQの回答は見られなかった（表１）

一方、コロナ以降の時期において、「感染時の精神的な不安」、「感染時の友人からの反応に対する不安」について相談する学生の性別に差は見られなかった。

また、コロナ以前・コロナ以降に関わらず、継続的に見られた相談として、発達障害や精神疾患が指摘される男子学生が生活リズムの乱れを心配するケースがあげられた。

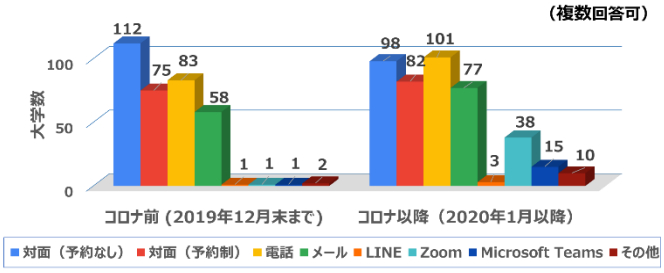

図１　健康相談の形態

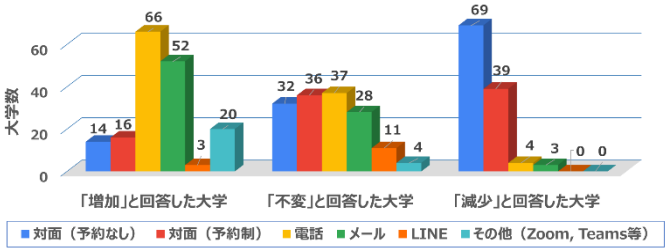

図２　健康相談件数に変化のあった相談形態

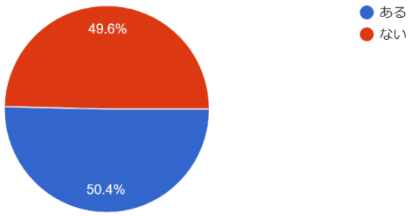

図３　保健管理センター等主体の健康教育の有無

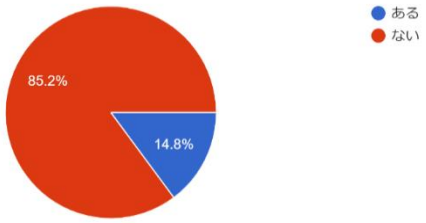

図４　健康教育における「心身の性差」の取り扱い

項目	男性	女性	LGBTQ
友人との関係	コロナ禍で入学した3年生に友人を作れないとの相談が多い（第1期にその傾向）	友人関係の相談より、友人が作れなく孤立、友人がいない	
家族との関係	母親とコミュニケーションがとれない	家族と距離がとりたい、家族との距離感	
		親が在宅勤務になり生活へ介入、就職へのプレッシャーなどで父親から家を追い出された	
		性的な問題や金銭的なハラスメント	
気持ちの落ち込み・うつ傾向		自粛生活の孤立によって、その後も友人と疎遠になり孤立	
やせ・ダイエット（拒食・過食など）		コロナ禍・以降、過食	
		人と一緒にご飯を食べることができず、食べることに興味がわかない	
メンタル面と食事摂取を結び付けた相談		ストレスから過食	
		マスクを外して他人といられない、友人と食事をすることができない	
昼夜逆転など、生活の乱れ	コロナ禍以降、ゲームにはまる学生が多い		
	オンライン授業のため、夜遅くまで学習し、昼夜逆転		
ステイホームから授業開始になり不適応	もともと対人関係に問題のある学生が、対面授業になり不安が増大	久しぶりの登校で人の目が気になり摂食障害に陥るケース	
	発達障害のある男子学生がオンラインや授業開始についていけず、退学		
睡眠の問題	コロナ禍で過眠が増加した印象		

表１　コロナ以降における相談で「性差」が見られた事項（第1期:2020年1月～2022年2月および第2期:2022年3月～2023年3月）

D．考察

コロナ禍における性差の視点を入れた調査から、従来では得難い貴重なデータを得た。コロナ禍における大学生の相談内容や表現型において性差が見られた。摂食の問題や家族との関係が女性に顕在化した一方、生活習慣の乱れは男性に多く見られる傾向があり、アドバンスド調査の結果によって、特にコロナ以降（第1期：2020年1月～2022年2月および第2期：2022年3月～2023年3月）にその傾向が支持された。

学生の学年などの属性に加え、心身の不調や家族との問題をコロナ前から抱えている学生ほど、コロナ禍による心身への影響がより大きいことが示唆された。

LGBTQとしての回答は極少数であったが、これは、本人から自己申告があった場合にのみ記録している影響もあったと考えられる。

健康教育を実施している大学で、心身の性差を扱っている大学は3割に満たず、今後の普及が望まれる。

E．結論

メンタル不調の「表現型」に性別の差が見られ

る傾向があり、女性では摂食障害の発症、男性では生活習慣の乱れが指摘された。

不安を自覚し保健管理センターに来室する学生は男性に多い印象がある。

学生の学年などの属性に加え、心身の不調や家族との問題をコロナ前から抱えている学生ほど、コロナ禍による心身への影響がより大きいことが示唆され、学生の属性や性別、生活環境を考慮した対応の必要性が示された。

今後、大学保健においても「性差の視点」導入の必要性・重要性が示唆された。

Ｆ．健康危険情報

なし

（分担研究報告書には記入せずに、総括研究報告書にまとめて記入します）

Ｇ．研究発表

1.　論文発表

片井みゆき「性差医学・医療：診療から研究開発「ジェンダードイノベーション：WaiSE」まで」総合健診、50 巻 1 号(2023)： p.130

Mariko Sato, Miyuki Katai, Nanae Kondo, Masatoshi Kawana, Ken Shimamoto. “Relationship Between Aging, Menopause, and Eicosapentaenoic Acid/Arachidonic Acid Ratio in Women With Dyslipidemia in Tokyo.” *TWMUJ* 6 (2022): 108-116.

2.　学会発表

〇片井 みゆき、森 瑞貴、田中 ゆり、木下 千栄子、加藤 透子、荒田 尚子：「大学保健管理センター学生相談での「性差」と「コロナ」の影響について全国調査研究（ポスター発表）」第60回全国大学保健管理研究集会、2022.10（神奈川）

森 瑞貴、片井 みゆき、田中 ゆり、〇木下 千栄子、加藤 透子、荒田 尚子：「大学保健管理における「性差の視点」導入状況の全国調査：Covid-19の影響も考慮して」第16回日本性差医学・医療学会学術集会、2023.02（東京）

Ｈ．知的財産

権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1. 特許取得：該当なし
2. 実用新案登録：該当なし
3. その他：該当なし